慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	修正派社会主義概論 : 特に唯物史観及び近世社会の経済的進化に関するベルンシュタインの見解
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.5 (1925. 5) ,p.743(69)- 786(112)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250501-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

呈するに至らずして止む。

(五)復古法問答書　弘化二年門人岩川知平の質問に答へたるものなり。

(六)復古法　弘化三年に著はしたるものなり。

(七)權貨法　嘉永三年の著作にて木活字版小本經濟問答祕記の上卷と略〻同一のものなれども內容多少の差異あり。

(八)垂統祕錄　著作年月詳かならず、余が本論に引用せる書には安政四年信昭(信淵の男)の跋文あり。

(九)物價餘論幷に簽書　餘論は天保九年簽書は同十三年の作にて松平定信の物價論を批評したるものなり。

(十)濟四海困窮建白　天保十三年の作なり、恐らくは德川の執政に上りたるものならん。

以上

修正派社會主義概論

——特に唯物史觀及び近世社會の經濟的進化に關するベルンシュタインの見解——

金原賢之助

一

一八七八年に制定せられた彼の有名なるビスマルクの社會黨鎭壓法は、獨逸社會民主黨史上に悲壯なる一時代を殘した。あらゆる社會主義的集會、結社、出版の禁止、社會民主々義運動者の追放。斯る集會に席貸せる家主及び此種文書を販賣せる書肆の營業禁止等が强行せられた。併しながら壓迫の存する所には反抗があり、反抗の爲には多少の意見の軒輊は之を拋棄しても事を共にせんとするのが人間の心理である。

結局ビスマルクの社會黨鎭壓法は世間識者の一般に認むるが如くに失敗に終り、唯得たる所は、社會民主黨の態度の惡化と、其得票及び議員數の增加とのみであつた。而も吾人が獨逸社會民主黨史上注意しなければならぬことは、此鎭壓法の下に在りし間は社會民主黨が其從來蒙り來たつたラッサルの影響を全然脫却してマルクシズムに傾いたと云ふことである。この事は、社會民主黨の碩學カール・カウツキイによつて起草せられ一八九一年エルフルトの民主黨大會に於いて可決せられた所謂エルフルト綱領の前文が、よく之を示して居るのである。

然るに一八九〇年遂に社會黨鎭壓法が廢止の運命に逢着するや、それ迄一致協力外部の敵に抗爭しつゝあつた社會民主黨員も內部を顧るの餘裕を生じ、幹部の政策に對して是非を論ずる者あるに至つたのは、是亦自然の成行である。

勿論この幹部の政策に對する反對意見には硬軟二派があつた。併しながら、幹部の政策を以てあまりに妥協的なりとなし、既往の革命的精神を失つたものであると云ふ急進派はエルフルトの大會に於いて退黨を命ぜられたが故に、その意見は重大なる問題を惹起すことなくして終つて了つたが、是に反して黨從來の政策を以て不利なりとなし、當面の問題としては其社會政策的任務に重きを置く可しと主張せる穩和派の意見は黨内に囂々たる論議を醸すに至つたのである。而して黨内に於いてこの後派の意見を代表せる有力者は、バヴァリヤ社會黨の首領フォルマァル（Georg von Vollmar）であつた。然らば何故斯る穩和意見が黨の重大問題となるに至つたかと云ふに、それは勿論このフォルマァル一派の見解が階級鬪爭の思想と相容れざる思想を表明してゐたと同時に、更に黨内よりしてマルクシズムに批判を加へ自らフォルマァル一派の運動に理論的根據を與ふるの論者を出だすに至つたからである。而もこの論者こそは黨の一有力者エドアルド・ベルンシュタイン（Eduard Bernstein, 1850）其人であつたのである。而して所謂レヴィジョニスト（修正主義者）なる語は、實にこのベルンシュタインによつて代表せらるゝ一派及び是と思想の傾向を同じうせる社會主義者を概稱せるものであつて、此等諸思想家の抱懷せる主義理論をレヴィジョニズム（修正主義）と名付くるのが常である。

上述の事情よりしても知り得らるゝが如くに元來レヴィジョニズムは社會主義の内部より出發して、而も尙ほ社會主義に對して批判的態度を採るものである。換言すれば社會主義の外部よりして是が頭上に鐵鎚を下さんとするものではなく、社會主義の立場に於いて之を改革せんとするの運動である。而して斯る運動が獨逸社會民主黨に及ぼせし影響の如何に著大であつたかは、敢えて茲に說明を要しないであらう。蓋し從來マルクスの敎義に唯一の信仰を繫いでゐた人々にとつては全く驚異すべき異端邪說であつたからである。

而して今日此運動の代表者を以て目せらるゝ人は、前述の如く獨逸社會民主黨の領袖たるエドアルド・ベルンシュタイン其人であるが、併しレヴィジョニズムとかレヴィジョニストとか云ふ名稱はベルンシュタイン自身の命名したものではない。或る大なる黨派や運動に對して最初は第三者又は反對者が輕侮の意味を以て與へた名稱が、知らず識らずの間に其黨派や運動の眞の名稱となつて了ふと云ふことは歷史上屢々見る所の事例であるが、（註一）此レヴィジョニズムも亦同樣に、第三者がベルンシュタイン一派に對して無理に押付けた名稱である。（註二）

（註一）例へば中世伊太利の改良派の名稱パターレネル（Patarener）は襤褸拾ひ黨と云ふ意味であり、英國の二大政黨たるホヰックス（Whigs）は酸き牛乳、トーリース（Tories）は盜賊を意味して居り、又プロテスタント（Protestant）クエーカー（Quaker）の如きもそれ〳〵罵稱であつて、何れも最初は反對者が罵倒の爲に用ひた名稱である。

（註二）Bernstein, Der Revisionismus in der Sozialdemocratie, 1909, Ss. 4-5.

然らば、何時の頃よりレヴィジョニズムなる名稱が用ひらるゝに至つたかと云ふに、それは決して古いことではない。今より二十三四年前のことで、アルフレド・ノーシッヒ（Alfred Nossig）博士の著『社會主義の修正』（"Die Revision des Sozialismus"）に因んで用ひらるゝに至つたのである（註三）ノーシッヒ博士の著書はマルクス主義の理論に對して批判を加へたるものであつてベルンシュタインの見解に依れば相當立派なるものであるとのことであるけれども、今日に於

いては修正主義者と呼ばるゝ人々からすらも排斥せられ、獨逸社會民主々義運動史上から全く忘れられて了つてゐる。然るに其修正派なる名稱のみは取り殘されて今日も依然採用せられてゐるのである。

（註三）Bernstein, a. a. O, S. 5; Karl Diehl, Über Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus, 4 Aufl., S. 314.

而して修正派なる名稱は、一般に、社會民主黨の傳統的理論に對して批判的態度を採る社會主義者の總てに冠せられたるものと解せられてゐるが、併し斯る意味に於いては、獨逸社會民主黨内に於いてもベルンシュタイン以前に既に修正主義者が存したるものと觀ることが出來る。即ちブルノ・シェーンランク博士（Bruno Schoenlank）は、一八九五年プレスラウに開催された社會民主黨大會に於いて、農業問題に關し、農業發達の狀態が既に理論とは相違してゐる以上黨の態度も是に順應すべき旨を主張し、「考へ方の修正が黨内に起りつゝあり」と宣言した。又一八九七年にも、黨の輿論たる困窮説は最早支持すべきでない。蓋し國民大多數の水準の向上しつゝあることは、獨逸の所得統計が既に之を立證してゐるからであると述べてゐる。併しながら其後其修正の事は遂ひに沙汰止みとなり、又シェーンランク自身も之を拋棄して了つたのである。（註四）　然るに前者と略ぼ相前後してベルンシュタインが社會民主黨の傳統的教義たるマルクス説に對して嚴然たる批判的論文を發表した。而もベルンシュタインの批判たるやシェーンランク等の批評が單にマルクス説の諸命題中の個々のものに關係したに過ぎなかつたに對して、其體系の全部に亘り、且つ其體系の社會哲學的基礎たる唯物史觀にも及んでゐたのである。其處で彼は遂ひに所謂修正派社會主義の頭目と看做さるゝに至つたのである。

（註四）Bernstein, a. a. O., Ss. 5-6; Diehl, a. a. O., S. 315.

ベルンシュタインは一八五〇年一月六日伯林に生まれ、今日も猶ほ存命中である。その社會民主黨の一員に加つたのは一八七二年のことであつたが、ビスマルクの社會黨鎮壓法の爲に一八七八年末より獨逸を離れ、二十數年の間瑞西及び英吉利に亡命した。而して其大部分は倫敦に在り、『ホールウェルト』（"Vorwart"）の通信員として活動する傍ら、フェビアン協會の人々と交友する所甚だ深つた。この英國滯在は實に彼の生涯を通じて思想の一大轉回期とはなつたのである。即ち最初純然たるマルクシストであつた彼は、英吉利の事物に接しつゝあつた間に、マルクシズムそのものに疑惑の眼を向けざるを得なくなつたのである。蓋しマルクスの豫言に依れば、勞働者は益々貧困の淵に沈まなければならぬ筈であるのに、英吉利の勞働者の狀態は工場法、勞働組合、消費組合等によつて確かに改善されつゝあるのである。又恐慌と言ひ、資本の集中と言ひ、決してマルクス説の通りになつて居らぬ。してみれば資本主義的社會組織の崩壞も、マルクスの考へしが如く近き將來に起るものではないであらう。果して然らばマルクス説は改訂の必要を生じたるものと認むるに至つたのである。斯くの如くして彼は一八九六年より九七年に亘り、獨逸社會民主黨の機關雜誌『ノイエ・ツァイト』（"Neue Zeit"）に、『社會主義の諸問題』と題して連續論文を寄せた。次いで一八九八年二月にも一論文を公にした。此等の論説は何れも社會民主黨内に瀰漫せる見解に對して批判を下すを目的とせるものであつたが、勿論彼のマルクシズムに對する批判は黨内に喧

々囂々たる非難を惹起し、一八九八年のストゥットガルトの社會民主黨大會に於いても又其翌年のハノヴァの大會に於いても重大問題となり、非難は彼の頭上に集中せられた。カウツキイ（Kautsky）は最も痛烈に彼を駁し又難じた。ベーベル（Bebel）も、黨内に分裂の生ずるを防止せんと努めたとは言へ、彼の主張には極力反對した。然るにベルンシュタインは斯る攻擊に答へんが爲に、ストゥットガルトの大會に一の信書を送つた。此書簡はベルンシュタインの見解の總べてを可なり明瞭に表白せるものであつた。次いで一八九九年に友人の勸めに從つて、『社會主義の前提と社會民主黨の任務』と題する一書を公にした。此書は彼の思想を纏めたもので、所謂修正派社會主義の綱領とも言ふべきものであり、且つ今日までマルクスに加へられた種々の批評中最も有力なるものである。而して其所說は、著者が眞正の社會主義者であるにも拘らず、結局進步せる經濟學者の結論と略ば歸を一にして居るのである。此點が彼の著作の價値ある所以であり、又吾人の興味を唆る所であるが、而も其社會主義に及ぼせし影響の點より觀れば彼の批判の遙かにブルジョア經濟學者の所論以上に出づることは、吾人の冗辯を待つまでもないのである。

以上の如く、ベルンシュタインは修正派社會主義者の首領と看做さるゝ人であるが、尙ほ其他にも修正主義者なる名稱を甘受すべき人々は社會民主黨内にも決して其數に乏しくない。例へば『社會主義と農業』の著者ダヴィド（Dr. Eduard David）、此派の機關雜誌『ゾチアリスティッシェン・モーナツヘフテ』（"Sozialistischen Monatshefte"）の主宰者ブロッホ（Dr. Joseph Bloch）其他エルム（Adolf von Elm）、フィッシャー（Edmund Fischer）、カムプフマイヤー（Paul Kampfmeyer）、レーベ（Paul Löbe）、ポイス（Heinrich Peus）、シュミット（Robert Schmidt）、シュルツ（Arthur Schulz）等數多の人々を擧げることが出來る。更に獨逸社會民主黨に屬せざる社會主義者中ベルンシュタイン一派と思想の傾向を同じくする諸思想家を枚擧するとならば、實に遑なきを覺ゆるのである。

而も此等多數の思想家の見解は總ての點に於いて相一致してゐる譯でもなく、又一定共通の綱領を有して居る次第でもない。故に通例修正派社會主義と言はゞベルンシュタイン一派の所說を指し、其代表者はベルンシュタイン其人である。以下吾人の述べんとする所も專らベルンシュタインの所論である。

二

既に述べたるが如くに、ベルンシュタインの見解は其著『社會主義の前提と社會民主黨の任務』（註一）によつて代表されてゐるが、此書の目的は「社會主義學說中に未だ殘存してゐる空想的な考へ方を一掃することによつて、社會民主々義的運動の上に理想的要素と現實的要素とを强むる」（註二）に在ると言つてゐる。此目的によつても既に彼のマルクシズムに對する態度の一班は推知することを得よう。而して今マルクシズムの重要なる命題を、唯物史觀、價値說、階級鬪爭說、資本集積說、恐慌說の諸說に分てば、ベルンシュタインはその總てに對して修正を施してゐる。勿論ベルンシュタインはマルクス主義そのものゝ顚覆を企圖したものではないけれども、若し彼の要求にしてマルクス主義の根本に關する改革であり、爲にマルクス主義は根本的の立直しを要するものとするならば、彼の要求を以て社會主義者としての立場に於けるマル

クス主義の顚覆であると觀るものあるは、當然の事と言はねばならぬ。マルクシストの一派が、ベルンシュタインの所說を以て『マルクシズムの危機』として憤激したのも、蓋し無理ならぬ次第である。

（註一）Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie.

（註二）a. a. O., S. 13.

マルクス主義の諸命題中最重要の意義を有するものは、所謂唯物史觀である。實に唯物史觀はマルクス學說の全體系を通貫せる社會哲學的基礎を成せるものである。エンゲルスはこの唯物史觀と餘剩價値說とを以てマルクスの二大發見であるとなし、「此等によつて社會主義は一個の科學となつた」と述べてゐるが、ベルンシュタインも亦この唯物史觀を以て、マルクス主義の最も重要なる要素たることを認めてゐる。既に唯物史觀がマルクス主義の全體系を貫徹せる根本法則である以上、「マルクス主義は原理上唯物史觀と共に成立し、共に倒壞するものであり、而して其史觀が制限を受くる場合には其程度に從つて爾餘の要素の地位も共々影響を蒙るものである。故にマルクス主義の當否に關する如何なる研究も、先づこの史觀が妥當性を有するか否か、或は有するとせば如何なる程度まで然るかと云ふ問題から出發しなければならぬ」（註三）のである。然らばベルンシュタインはマルクスの唯物史觀に對して如何なる批判を下してゐるか。

（註三）Bernstein, a. a. O., Ss. 32-33.

先づベルンシュタインの說く所に依れば、「唯物史觀の當否に關する問題は、歷史の必然性及び其理由に關する問題である。唯物主義者であると云ふことは、先づ第一に總ての現象を物質の必然的運動に遡らしむると云ふことを意味するのである。物質の運動は、唯物主義說に從へば、機械的過程として必然に行はれるものであつて、如何なる過程もそれ以前に存する必然的作用なくんば起らず、又如何なる現象も其物質的原因なくしては存在しないのである。即ち物質の運動が思想の形體及び意志の方向を決定するのであつて、斯樣に此事並に人類世界に於ける總ての現象は亦物質的に必然なるものである……故に唯物主義を歷史的解釋に適用することは、勿論、一切歷史上の事件及び發展の必然性を主張することを意味するのである。唯物主義者にとつて獨り問題となるものは、如何なる方法に於いて『必然性』が人類の歷史に行はるゝや、如何なる力の要素が歷史に於いて決定的發言を爲すや、各種の力の要素相互間の關係は如何、歷史上如何なる役割が自然、經濟、法律制度、思想に屬するや、と云ふことだけである。」（註四）

（註四）Bernstein, a. a. O., S. 33.

マルクスは此問題に對して如何なる解答を與へてゐるかと云ふに、彼は人類各時代の物質的生產力及び生產關係を決定的要素として指示してゐるのである。曰く「物質的生活の生產方法は一般に社會的、政治的、及び精神的生活の過程を決定するものである。社會の物質的生產力は、其發展の一定の階段に於いて、そのものが、從來其內に活動して來た所の當時の生產關係或は唯其れの法的表現に過ぎない所の財產關係と衝突するに至る。此等の關係は生產力の發展の形式から變じて之が桎梏となる。茲に於いて社會革命の時代が到來するのである。經濟的基礎の變動と共に、巨大なる地上建築の全部（一定の社會的意識の形體が相應する所の法律的並に

政治的の制度）が、或は徐々に或は急激に變革する。……一の社會形態は、それに十分餘地の存する所の總ての生産力が其發展を爲すに先立つて、顚覆するものでは決してない。又新らたなる一層高度の生産關係は、そのもの丶物質的存在條件が古き社會そのもの丶胎内に孵化された後でなければ、決して其處に現出し來るものではない。……ブルジョア的の生産關係は社會的生産過程の敵對的形態を採れるもの丶最後のものである。……乍併、ブルジョア社會の胎内に發展したる生産力は、同時に此敵對の解決に必要なる物質的條件を形造る。それ故に此社會的形態を以て人類社會の前史は閉づることゝなるのである。」（註五）

（註五）Karl Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, Vorwort SS. LV-LVI.

以上はマルクス自身が歴史的發展の上に於ける物質的關係の影響を述べたものであつて、彼の唯物史觀の骨子と認めらるゝ章句である。今此章句を觀察するに、「就中吾人の眼につくものは『或は徐々に或は急激に』と云ふ一句の外に存する其斷言的句調である。而も其第二節に於いては『意識』と『存在』とが非常に鋭く對立せられてゐるので、稍もすればこれから、人間は歴史的勢力の生きた道具に過ぎないとの結論が引かれ得る程である。而してこれは、上記の章句に續いた文章に於いて幾分修正されてはゐるけれども全體として觀れば、人類の意識と意慾とは物質的作用に全然從屬した條件として表はれてゐる」（註六）のである。

（註六）Bernstein, a. a. O., Ss. 34-35.

併しマルクスの斯る見解は、ベルンシュタインの觀る所を以てすれば、一面的な説明に過ぎないのである。それは技術的經濟的要素を餘りに誇張した考へ方で、正に人類には頭腦と云ふものゝあることを忘れた議論である。勿論議論の進め方によつては、經濟的要素の影響のみを極端に誇張して考へることも出來るし、又經濟上の動機よりも非經濟的要素に遙かに强い決定力を與へることも出來る。その何れも一理あることではあるが、併し何れにしても單なる説明の相違であると同時に兩者とも誤解であるとベルンシュタインは觀て居るのである（註七）

（註七）Bernstein, Der Revisionismus in der Sozialdemocratie, S. 11

飜つて資本論第一卷序文を觀ると、少なからず、唯物史觀が妥協的になつた文章を見出すのである。即ち資本主義的生産の『自然法』に關して、「此鐵の如き堅固不動の必然性を以て作用し貫徹する傾向が問題である」と言つてゐるのにその直ぐ次には、社會は自然に適した發達の形態を分娩するの苦痛を『短縮し輕減する』ことが出來る、と云ふ屢々引用せらるゝ一句がある。又エンゲルスの『アンチ・デューリング論』中の歴史的唯物主義に關する説明に於いては、人間の生産關係に從屬する程度が非常に制限せられてゐるが如くに見ゆる。其説明に曰く『總ての社會的變革及び政治的變革の窮極の諸原因』は、人間の頭腦中よりは寧ろ『生産及び交換の方法の變化の中に』求む可きであると。併しベルンシュタインの解釋に依れば、既に『窮極の原因』には、其原因と共力作用する他の種類の原因即ち第二位、第三位……等の諸原因が包含されてゐる。而して斯樣な第二位、第三位等の原因が大なればなる程、窮極原因の決定力は益々質的にも又量的にも制限せらるゝ、と云ふことは明白である。故に如何に低位に位する力であつても之を無視することは、あらゆる數學者の知れ

るが如くに、其結果最大の過誤を生ずることがあり得るものである。（註八）茲に於いてベルンシュタインは歴史的進化の上に働く物質的要素以外の要素の力をも認めなければならぬと主張するのである。

（註八）Bernstein, "Die Voraussetzungen," Ss. 35-36

勿論ベルンシュタインもマルクス、エンゲルスは始から終まで非經濟的要素を看過して了つたとは云はぬ。否な却つて斯る推定の反證となる章句が彼等の初期の著作から數限りなく引用し得らるゝと言つてゐる。併しベルンシュタインが茲で問題と爲してゐるのは程度の問題である。觀念的諸要素が認められてゐたか何うかと云ふことではなく、寧ろ、歴史に及ぼす如何なる程度の影響が其觀念的諸要素に與へられてゐたかと云ふことが要點である。此點より觀ればマルクス、エンゲルスは、元來非經濟的要素が

社會進化の上に及ぼす力と又それが生産關係の上に及ぼす反作用とを、彼等後年の著述に於けるよりは遙か薄弱なるものと認定したと、ベルンシュタインは斷定してゐる。例へばエンゲルスは一八九五年十月の "Sozialistischen Akademiker" に登載した二通の書簡（一は一八九〇年、他は一八九四年に書かれたもの）に於いて、『法律の形式』、政治上法律上哲學上の學説、宗教上の意見或は教義は、歴史の經過に影響を及ぼすと共に又多くの場合に『その形態を專ら決定』する勢力であると認め、「政治、法律、哲學、宗教、文學、藝術等の發達は、經濟的發達に其基礎を置いてゐるものであるが、併し此等のものは總て相互に反動し合ふものであるし又經濟的基礎にも影響を及ぼすものである」と述べてゐる。此言は、前に述べたマルクスの説とはいさゝか違つた響きを吾人に與ふるものである。併しこれは決して驚くに足らぬことであるとベルンシュタインは考へる。蓋し如何なる學説であつても、先づ最初唱へらるゝ場合には舊説の維持し難き所以を立證するが爲に何等疑ひを容るゝ餘地なき形式を採つて表はれる、而して其後尚ほ一層其權威を維持せんが爲に始め誇張せし部分を切り捨てゝ修正するのが常であるからである。而してマルクス、エンゲルスの唯物史觀が後年に至つて幾分修正されてゐる事はエンゲルス自身も明らさまに認容してゐるのである。

茲に於いてベルンシュタインは斯う主張するのである。「今日唯物的歴史學説を奉ずる人は、其最も發達せる形式に於いて之を適用する樣に餘儀なくされてゐるのであつて、其本來の形式に於いてゝはない。詳言すれば生産力及び生産關係の發展と影響の外に、亦各時代の法律觀念及び倫理觀念と歴史的及び宗教的傳統精神、並に地理的並に其他の自然的狀態の影響を十分に斟酌しなければならぬのである。この一事は、最早單に古代の探求のみが問題ではなく寧ろ將來の發展を考察することが既に問題となつてゐる場合に、又唯物史觀を將來への指導者として役立たせようと云ふ場合に當つて、特に考慮に入れて置かなければならぬことである。」（註九）而して「若し何人か、純經濟的以外の性質を有する勢力を力説すること、及び生産技術並に其豫見されたる發達以外の經濟的要素を顧慮することを、初めから高くとまつて折衷説として排斥するならば、それは歴史的唯物主義を益するよりは寧ろ之を害するものである」（註十）と。以てベルンシュタインの唯物史觀に對する態度の大體は之を卜することが出來ようと思ふ。

（註九）Bernstein, "Die Voraussetzungen," S. 37.
（註十）a. a. O., S. 39.

併しながら、歴史に及ぼす非經濟的要素の影響を認むるならば、この「非經濟的要素が純經濟的勢力と相併んで社會生活に影響を及ぼす程度の强ければ强き程、それに從つて吾人が歴史的必然性と稱するもの丶支配も亦益々變化」せざるを得ないのである。然るに「科學とか藝術とか、夥しく多數となれる諸社會關係とかは、今日に於いては過去の或る時代に於けるよりも、經濟に從屬すること遙かに尠いのである。或は誤解を避けんが爲に一層正確に言へば、現在到達せる經濟的發達の狀態は、觀念的諸要素殊に倫理的要素に、舊時在りしよりも一層大なる自由活動の餘地を殘してゐる」之が結果として、技術的經濟的進化と他の社會制度の進化との間に於ける因果關係は、益々間接的となり、從つて前者の自然的必然性は、益々後者の形態に對する規準たらざるに至るのである」。（註十一）

（註十一）a. a. O., Ss. 40-41.

斯くしてベルンシュタインは茲に一の結論を惹き來るのである。「唯物史觀は其初め創述者によつて與へられしとは相違せる形式に於いて今日吾人の眼前に存するのである。唯物史觀は、創述者其人達の手によつて發達を遂げ、而して創始者その人達によつてその絶對的解釋に對して制限を受けたのである。是は、既に述べたるが如くに、如何なる學說にも存する歴史である。而して唯物史觀は、斯る制限を受くることによつて、其根本思想の統一性を失ふことなく、寧ろ眞に歴史を科學的に考察するの學說となるのであり、又斯く擴張せる意味に於いてのみ今日も尙ほ價値を有することが出來るのである」（註十二）云々と論斷を下してゐる。

（註十二）Bernstein, a. a. O., Ss. 41-42.

ベルンシュタインが唯物主義の歴史解釋に反對し、マルクス、エンゲルスの歴史觀に加へんとせし修正は正に以上の如くである。故に彼は唯物史觀に批判を加へたとは言へ、決して唯物史觀を排斥して了つたのではない。社會進化の上に於ける經濟的要素の勢力を無視して了つたのではない。たゞ所謂擴張した意味に於いて唯物史觀を採用してゐるのである。即ち一方に於いては經濟的要素が社會進化の重要なる要素であることは認容すると同時に、他方に於いては經濟的以外の要素も亦重要なる役割を演ずるものなることを主張するのである。而して茲に其他の要素とは言ふまでもなく理想主義的要素である。彼は社會主義の上に唯物的要素と共に理想主義的要素を强調することによつて彼の修正主義の基礎を築かんとしたのである。これが修正派社會主義の出發點であり、又近世社會主義運動史上に於ける意義ある思想の轉向である。

要するにマルクスの唯物史觀は哲學上の唯物論と同一の見地に立てるものである。世にはマルクスの唯物史觀は彼獨特の歴史觀であり世界觀であつて、哲學上の唯物論とは全然別種のものであると主張し、其歴史觀が哲學上の唯物論に立脚せることを掩はんとする論者がある。然り唯物史觀は哲學上の唯物論そのものではない。併しマルクスの唯物史觀が哲學上の唯物論と同一見地に立てることは、既揭の一句「人類の意志が人類そのもの丶存在を決定するのではなくして、寧ろ反對に人類の社會的存在が其意識を決定するのである」云々に徵しても明かであらう。

歴史の觀察に於いて唯物論を採りしマルクスが、哲學上に於いても一個の唯物論者たりしことは蓋し偶然ではないのである。そは兎に角として既に唯物論は一種の機械觀であり、又一の

物質論的必然論である。これに於いては人間の意志は無視せられ又は非常に弱いものとされ、人間は自然の法則のまゝに支配されると云ふ宿命論に陷つてゐる。ベルンシュタインは茲に着眼したのである。ベルンシュタインは歴史の經過を唯物的、機械的にのみ觀察するを排斥し、マルクス説をカントに依つて修正せんと試みたのである。彼は既にノイエ・ツァイト第十六卷に登載した『社會主義に於ける現實的要素と觀念的要素』(註十三)と題する論文に於いて『カントに歸れ』は社會主義に於いても或程度まで必要なる旨を述べてゐる。今又彼は『社會主義の前提』に於いても、勞働者階級は實現すべき理想を有せずとのマルクスの言に反對し、社會民主黨は一人のカント即ち理想を蔑視し物質的要素を以て進歩の最高動力と爲すは自己僞瞞なることを示す所のカントを必要とすると强調してゐるのである。彼の「自由なる人格の形成と確保はあらゆる社會主義の標準的目的である」云々の言の如きは、カント倫理觀の延長と觀ることも出來ようと思ふ。(註十四)

(註十三) "Das realistische und das ideologische Moment in Sozialismus," Die Neue Zeit, sechzehnter Jahrgang, I S. 225, II S. 338.

(註十四) "Die Voraussetzungen," Schlusskapital "Endziel und Bewegung," S. 233—

三

更にベルンシュタインの最も得意とする所は、近世社會の經濟的發達に對してマルクスの抱懷せる資本集積説、恐慌説、資本主義崩壞説を打破する爲に、事實に立脚せる統計的材料に據つて下せる批判である。

姑くマルクス説に從へば、資本家は利潤を獲るを目的としてゐるが、之が爲には餘剩價値を生産しなければならぬ。然るに市場には競爭が

行はるゝが故に、生産物の價格の引上によつて餘剩價値を捻出することは出來ぬ。即ち之を産み出す爲には出來るだけ生産費を安くしなければならぬ。所が生産費の低下の爲に取り得る策は三つある。第一は賃銀の引下、第二は勞働時間の延長、而して第三は勞働の生産能率の上進即ち是である。而も此等三策の中第一と第二とには一定の限度があつて無限に行ふことは出來ぬ。結局殘る所は第三の策即ち勞働組織の改善と機械の完成とによつて人間勞働力の節約を爲すの外はない。然るに餘剩價値を産出するものは勞働であるから、資本家は人間勞働力を節約すればする程、餘剩價値を生産しつゝある勞働をして益々其作用を停止せしむることゝなる、言はゞ資本家は金の卵を産んで呉れる雌雞を撲殺するのである。其結果、利潤率の低下は徐々に起る。元來利潤率は資本を生産的に使用せしむる誘因であるから、若し利潤率が一定點以下に低下するならば、生産的企業に對する衝動は減じて了ふ。茲に於いて一方に於いては、各個の活動的なる資本は其利潤額を確保し增大せしめんと努めつゝある間に、他方に於いては、生産の擴大に既に停滯が始つてゐる。茲に資本主義的生産方法の内在的矛盾が存するのである。而して資本家は益々餘剩價値を確保せんが爲に、勞働生産力の增進に努めなければならぬ。これが爲には、機械等の利用に資本の益々大なる部分が投ぜられ、賃銀として支拂はるゝ資本部分は漸次縮少することゝなる。そこで勞働の生産力が增すに從つて資本の蓄積は愈々迅速に其度を進めることゝなる。其結果、資本中賃銀として支出せらるゝ部分の割合は益々小となるが故に勞働者の地位は益々不安となり、其境遇は愈々惡化することゝなる。換言すれば一方に於け

る資本の集積は、同時に勞働者の貧窮、苦痛、隷屬、墮落を齎らすのである。

他方資本家企業家間に在つても低廉なる生産費によつて生産を爲し得るもの即ち大企業家は競爭に於ける優勝者となり、小企業家は漸次壓倒せられて大企業家に併呑せられ、資本の集積と共に經營の集中を見ることゝなる。同時に現社會に於いては、生産は擧げて企業家の營む所に委せられ其間之を指導すべき何等の聯絡統一なきが故に、當然需要供給の不均衡を來たす。需要供給の不適合起れば必ず恐慌の襲來を來たすことゝなる。而してその恐慌たるや、其回を重ぬる度毎に益々其猛烈を加へる。恐慌愈々猛烈となれば、小企業は之に堪へ得ずして倒れ、大企業集中の勢は益々助長せらるゝのである。其結果、資本は益々少數資本家豪族の手に集中せられ、大多數の者は無産資者とならざるを得なくなる。斯くして結局資本の獨占は生産力の發達を助くることなく、却つて其發達を阻害する桎梏となり、遂に資本主義崩壞の時は來るのである。

『さて以上のことは總て正しいであらうか』。先づベルンシュタインは、資本主義の進化に關するマルクス説に對して斯く問を起しつゝ、自ら之に答へる。曰く「然り、また然らず」と。即ちベルンシュタインは、以上の如き資本主義社會進化の説は『傾向として』は正しいものであることを認めてゐる。又その理論も現實から採つたものであることを認めてゐる。例へば利潤率の低下は事實である。生産過剰と恐慌も事實である。資本の週期的破壞も事實である。工業資本の集中集積も事實である。餘剰價値率の增加も事實である。而もベルンシュタインは前記マルクス説をそのまゝ事實として認容するを拒まんとする者である。何となれば、前記マルクス説は常に現實と一致してゐない、否な現實と背反する場合が尠くないからである。

然らば、マルクス説の描寫は傾向としては正しいものでありながら現實と一致せざる場合あるは何故であるかと云ふに、ベルンシュタインの觀る所を以てすれば、其叙述が不完全であるからである。即ちマルクスは、或場合には前記の矛盾を制限する作用を有する諸條件を全然等閑に附して居り、又或場合には之を論じてゐても、其後其確定せる事實を概括對照する場合に至ると、之を拋棄して顧みないのである。其結果、對立（Antagonismen）の社會上に及ぼす影響が、現實にあるよりは遙かに强く且つ一層直接的に現はされてゐるからである。（註一）

（註一）Bernstein, "Die Voraussetzungen," Ss. 83-84

マルクスの斯くの如き叙述方法は、『資本論』第一卷第二十三章第二節に於いて『多數の個々資本家の相互反撥』を述ぶるに當つても、用ひられてゐるのである。即ち其の際マルクスは、資本の蓄積增進すると共に、資本家の數が斯る資本分散の結果『多かれ或は少なかれ』增加する旨を陳べてゐる（第四版五八九頁）然るにそれに續く説明に於いては、資本家の數のこの增大を全然眼中に置いてゐない。全く問題は、『多かれ或は少なかれ』と云つた丈で終つて了つたやうに見える。第一卷の終りに於いても、たゞ『資本家豪族の數が絶えず減少する』ことに就いて陳述があるのみであるし、第三卷に於いても又之に就いては何等根本的の變更が加へられてゐない。其處で讀者が右の所説から受くる印象は、資本所有者の數が、假令絶對的ではないとしても勞働者階級の增大に比較して、絶えず減少してゐると云ふことである。從つて社會民主黨に

於いても、資産の集中は産業的企業の集中に平行して進行してゐると云ふ觀念が、通行意見となつてゐるのである（註二）

（註二）Bernstein, a. a. O., Ss. 84-85.

併しながら以上の如きマルクス説は、ベルンシュタインの觀る所を以てすれば決して事實に合致して居らないのである。即ち先づ第一に彼は、株式會社なる企業形態は必ずしも資本を資本家豪族の手に集中することなくして大經營を可能ならしむるものたることを、指摘してゐるのである。彼自らの言を借りて云へば、「株式會社なる企業形態は經營集中に依る資本集中と云ふ傾向に對して、非常に顯著なる反對作用を及ぼしてゐるのである。即ち株式會社制度は、嘗て集積されたる資本の廣汎なる分散を可能ならしめ、而して個々の資本家豪族が産業的企業集中の目的を以てする資本の擅有を、無用ならしめてゐる。假令非社會主義的經濟學者が、現在の社會狀態辯護の爲に此事實を利用したとするも、而もそれは社會主義者にとつて、此事實を陰蔽し又は之に言及しないと云ふ理由にはならぬ。寧ろ此事實の實際上の擴大と其意義とを認識すると云ふことが問題なのである」。（註三）

（註三）Bernstein, a. a. O., S. 85

而して此問題は實際の統計を參照すれば全く明白なることで、此點に關する世人の觀念の如何に間違だらけであるかゞ立證せらるゝのである。而して之が證明資料としてベルンシュタインは先づ、資本主義的集中の代表的形態たるトラストの資産分配に關する統計を擧げてゐる。

「一八九八年に設立せられし英國の縫絲トラストは、一萬二千三百人より尠なからざる株式所有者を數へた。其内譯を表示すれば次の通りである。

通常株所有者	六、〇〇〇人……其平均資本一、二〇〇馬克
優先株所有者	四、五〇〇人……〃　三、〇〇〇〃
社債券所有者	一、八〇〇人……〃　六、〇〇〇〃

「細絲紡績業者トラストも亦可なり多數の株主即ち五千四百五十四人を有して居り、一八九九年には次の通りであつた。

通常株所有者	二、九〇四人……其平均資本六、〇〇〇馬克
優先株所有者	一、八七〇人……〃　一〇、〇〇〇〃
社債券所有者	六八〇人……〃　二六、〇〇〇〃

「棉絲トラストのピー・エンド・ティー・コートも同樣であり、大マンチェスター運河會社の株主數は端數を除いて四萬人の總計となり、リプトン大食料品會社のそれは總計七萬四千二百六十二人である。最近に於ける資本集積の一例として擧げらるゝ倫敦の倉庫業スピーアス・エンド・ポンドは、其總資本二千六百萬馬克であるが、四千六百五十人の株主を有し、而もその中唯五百五十人の少數が一萬馬克以上の株式を有してゐるに過ぎない。此等は、集中せられた企業の資産の持分が、如何に分散してゐるかと云ふことの二三の實例である。

「さて此等の株主の總てが、當然所謂資本家と名付けらるべき程大なるものばかりでないことは、明かである。勿論同一の大資本家が、あらゆる可能なる會社に小株主として現はれてゐることも屢々ある。併し斯くの如き事實あるにも拘らず、株式所有者の數と其所有株式の平均額とは急速に增大しつゝあることが解る。英蘭に於ける株式所有者の數は概括して百萬を遙かに超過するものと計算せらるゝ、而して此計算は、單に一八九六年だけを採つてみるも、聯合王國の株式會社數が二萬一千二百二十三に達し、其拂込資本が二百二十二億九千萬馬克に上つて居り、而も此中には未だ英蘭以外で設立せられし外國企業、國債等は包含されてゐないことを思

へば、決して過大の見積とは思はれないのである」（註四）と彼は觀察して居るのである。

（註四）Bernstein, a. a. O, Ss. 85-87.

更にベルンシュタインは、以上の事實は各人の所得の上にも反映してゐるとなし、英國の所得統計を掲げてゐる。彼の述ぶる所に從へば「聯合王國に於いては一八九三―九四年の財政年度にD及びEの項目（營業利潤、高級官吏の地位等より得る所得）に示された所の、三千馬克及び之に超過する所得を有する者の數は、七十二萬七千二百七十人に達した。併し之には尚ほ土地（地代、小作料）貸家及び課稅し得る投資より得る所得に對して納稅する者が加算せらるゝ。此等の團體に屬する人々も亦、前記の納稅團體と殆んど同額の納稅を爲してゐる、即ち前者の總所得七十億馬克に對して後者は六十億馬克の所得を有してゐる。而して後者の團體に屬する納稅者數は、三千馬克以上の收得ある人の數を、殆んど二倍するものと思はれる。

「一八九七年五月二十二日の『ブリティシュ・レヴュー』には、英蘭に於ける一八五一年より一八八一年に至る間の所得の增大に關する或數字が記載せられてゐる。それに從ふと、一五〇乃至一、〇〇〇磅の所得を有する家族（ブルジョア中の中層階級及び下層階級並に勞働者の最上層貴族階級）が、一八五一年に端數を除いて三十萬、一八八一年に同じく九十九萬と計算されてゐる。此三十年間に人口は二七對三五の割合即ち略ぼ三割の增加であつたのに、斯る所得に屬する家族の數は二七對九〇の割合即ち二十三割三分三厘餘の上昇を示した。而して今日は斯る所得の納稅者百五十萬に達せりと、ギッフェン（Giffen）は概算してゐる。」（註五）

以上は英吉利に於ける實例であるが、他の諸國の狀態も決して原則に於いては之と異る所がないと爲して、彼は佛、獨等の統計を參照してゐる。今其一二を摘記すれば、「佛蘭西はマルホールに從へば、其總家族數八百萬であるが、其中六百萬の勞働者及び十六萬の大富豪に對して百七十萬家族は五千二百馬克の平均所得を有し大小ブルジョア的生活狀態に在る。普魯西に於いては、ラッサルの讀者の知れるが如くに一八五四年には千六百三十萬の人口中、一千ターレル以上の所得を有せし者は僅に四萬四千四百七人に過ぎなかつたが、一八九一―九五年には、約三千三百萬の總人口中、三十二萬千二百九十六人が三千馬克以上の所得に對して納稅した。一八九七―九八年には其數三十四萬七千三百二十八に達し、人口の增加率が十割であるに對して比較的に有福なる諸階級の層は七倍以上に增大した。」更に最近の統計を採つてみるも事實は正に以上と同一である。（註六）

（註五）a. a. O, Ss. 86-7

（註六）a. a. O, Ss. 87-8

以上の統計は抑々吾人に何を語つてゐるか。そは云ふまでもなく有產者の數の增加である。茲に於いてベルンシュタインは一の推論を引いて曰く、「されば現在の進化が、有產者の數の相對的或は絕體的減少を示すと認定するは、全く誤りである。マルクスの言の如くに『多かれ少なかれ』ではなく、直ちに『より多く』である。即ち絕對的にも相對的にも有產者の數は增加しつゝあるのである」。（註七）

（註七）a. a. O, S. 88.

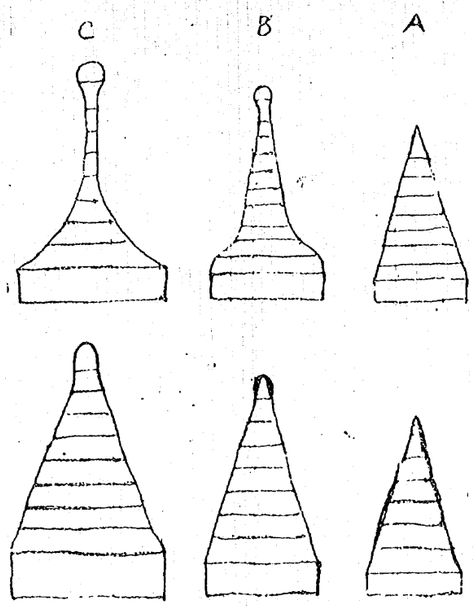
然るに從來社會民主黨內の通行意見となつてゐたものは、前にも一言せしが如くに有產者數の減少を主張してゐたのであるが、ベルンシュタインの觀る所に依れば斯る見解の支持され來た

ったのには三個の理由が存するのである。第一は彼等の利用せし所得統計は甚だ不十分なるものであつたこと、第二は所得の移動と企業の移動とを同一なりと觀取せしこと、並に第三は社會主義を以て根本的に不可避のものたる所以を立證し得んとする社會主義者の希望努力が、却つて第二の誤解を强からしめしこと即ち是である。（註八）然るに事實は正にベルンシュタインの立證せしが如くであつてみれば、社會民主黨が依然その活動と見込とは有產者の數の減退に懸つてゐると確信してゐることは、實に社會民主黨は實際眠つてゐても好いと云ふことを意味することゝなるのである。故にベルンシュタインを以て觀れば、社會主義の見込は社會の富の減退よりは寧ろ其增加にこそ依存するのである。（註九）

（註八）Bernstein, Die heutige Einkommensbesteuerung und die Aufgabe der Volkswirtschaft, 1902, Ss. 20-21

（註九）"Die Voraussetzungen," Ss. 88-89

以上の如く有產者の數は增加する一方で決して減少しないことを主張すると同時に、ベルンシュタインは右の事實に立脚して、社會の階級分岐も從來より單純になる所ではなく、寧ろ所得高に於いても職業別に於いても著しく多岐となり分化しつゝあることを主張してゐるのである。即ち彼の說く所に依れば、前頁所載の圖は所得と財產の發達を示すものであるが、先づ其出發點としてA圖の如くに一個の土臺石と其上に規則正しき圓錐形を有する社會の三陵塔（プラミッド）を想像する。その土臺石は賃銀勞働者階級を、中央の部分は中小ブルジョア階級を、最上の部分即ち尖端は大地主と大資本家の階級を示してゐるものとする。而して今エルフルト綱領の理論通りに社會が發達して行くものならば、第一圖BCに示すが如くに尖端は膨脹して頭となり、中央部は頸の如く細くなり、土臺石は益々重厚なる形を示す筈である。然るに事實はさうなつて居らぬ。統計の指示する所に依れば、事實は第二圖の如くなつてゐる。勿論全體の形には多少變化が現はれて、上部は幾分圓味を帶びて來る。即ち大資本家階級は益々强大となつてゐるが、其他は前と同樣のぼかしになつてゐて、土臺石と最上部との間の如何なる層も縮小してゐないのである。即ち實際の社會の發達は宛も手風琴をぶらさげて其下部に錘を吊し上部より引き上ぐるが如くに、其階級分岐は益々複雜多岐となつて居るのである。（註十）



第一圖　第二圖

（註十）Bernstein, Der Revisionismus in der Sozialdemokratie, Ss. 32-33

而して以上の事實は、假りに所得統計及び職業統計によつて經驗的に確證し得ないとしても近世經濟の必然的結果として純演繹的方法によつても立證し得ると彼は主張するのである。蓋し近世生產方法の第一の特色は、勞働の生產力の異常なる增進である。其結果は生產の尠なからざる增大である、換言すれば使用財の大量生產である。然らば、この富は何處に存在するか。

或は直截的に其問題の眞髓に觸れんが爲に換言すれば、工業勞働者が其勞銀によつて制限せられた自己の消費量以上に生産する餘剰生産物は、果して何人の手に留るか。資本家豪族達は、世間に流布する諷刺よりも十倍も大なる胃袋を持つことが出來ようとも、又其實際有するより十倍も多數の僕婢を傭つて置くことが出來ようとも、彼等の消費量は國民年々の生産高に比しては、秤に乘せられた羽毛の如きものに過ぎぬであらう。蓋し資本主義的大生産は特に大量生産であることが明かに認められてゐるからである。

既に資本家豪族の消費能力には限りがあるとすれば、彼等並に其使用人の消費せざる部分の商品は何人の手に收めらるゝか。そは言ふまでもなく、若し此部分が何等かの方法でプロレタリエルの手に流入せぬとするならば、それは他の階級に依つて吸收せられなければならぬ筈である。資本家の數の相對的減少の度が進んで、プロレタリアの生活狀態が良好となるか或は中層階級が增加するか、これが不斷の生産增進が吾人に許す唯一の撰擇である。恐慌や軍隊や其他の不生産的支出の爲には非常に多くの浪費が行はるゝものであるが、併し近時に於いては常に餘剰生産物の一小部分を吸收するに過ぎぬ。故に若し勞働者階級が、『資本』が中層階級を世界から消滅せしむるまで待たんと欲するならば彼は實に長眠を貪つて好い筈である。蓋し資本は此階級を一の形で剝奪しては復た別の形で常に新しく復活せしむるであらう。經濟の寄生的分子を吸收するの使命を有するものは、『資本』ではなくて勞働階級そのものである（註十一）と言ふのである。

（註十一）Die Vorausschätzung, S. 80-90

四

前述の如くに、ベルンシュタインの論證に據れば、株式會社なる企業形態は資本の分散を可能ならしむるが故に、資本家豪族も增加するが同時にそれ以下の大小資本家の數も絶對的にも相對的にも增大しつゝあるのである。而して社會階級も單純になる所が却つて其所得高に於き職業別に於き益々複雜多岐となつて居るのである。決して資本は漸次其數を減ずる資本家豪族の手中にのみ吸收さるゝことはないと云ふのである。然らば茲に方面を一轉して、企業組織の點より觀察すれば其實狀は果して如何。

マルクス說に從へば、農工商業上の競爭に於いて小企業は大企業の敵に非らず、結局資本の集積は經營の集中を伴ふと主張する。又株式會社の制度は、資本を分散せしむるとは言へ、大經營を可能ならしむるものであつてみれば、大經營は中小經營を壓倒併呑しつゝあるか。是に對するベルンシュタインの解答は、英獨米佛等の實際を通覽するに、大經營の中小經營兼併の傾向も決してマルクス說の如き程度に達して居らぬと云ふのである。以下聊かベルンシュタインの論據とする資料を擧げて其理由を賓さんに先づ彼は英吉利の工場監督官の報告（一八九六年）を觀察してゐる。

それに從へば、工場法の支配の下に在る工場及び仕事場（Fabriken und Werkstätten）に於ける勞働者數は總計四百三十九萬八千九百八十三人であつた。其數は猶ほ一八九一年の國勢調査の指示する工業從業者數の半にも達してゐない。即ち其國勢調査の數は運輸業を除いて九百二萬五千九百二人であつた。其處で工場監督官の報告に洩れてゐる數は四百六十二萬六千九百十九人であるが、其中四分の一乃至三分の一は、其

國勢調査に列擧せられし生産部門の事業經營者及び工場法に支配されざる中規模大規模の經營に從事する者として數ふことが出來る。殘る概數三百萬人は小規模經營に於ける使用人と小親方とである。

又工場法の下に在る四百萬の勞働者は總計十六萬九百四十八の工場及び仕事場に分布されてゐたから、之を一經營に就いて平均すれば、二十七人乃至二十八の勞働者である。若し工場と仕事場とを離して觀るならば、工場七萬六千二百七十九、其勞働者三百七十四萬三千四百十八人、仕事場八萬千六百六十九、其勞働者六十五萬五千五百六十五人である。之を平均すれば勞働者は一工場に就き四十九人、一仕事場に就き八人である。一工場に就き四十九人の勞働者と云ふ平均數は、工場として登記された經營の少くとも三分の二は六人乃至五十人の勞働者を有する中經營の部類に屬する、從つて五十人若しくはそれ以上の勞働者を有する經營は多くとも二萬乃至二萬五千となり、總計約三百萬の勞働者を代表することゝなることを、示してゐるのである。此數に運輸業に從事する百十七萬千九百九十人の中最も多く見積つても四分の三が大經營に屬するものとして其數を合算すると、大經營の勞働者並に從業者の全數は三百五十萬人乃至四百萬人となり、是に對して五百五十萬人以上の中小經營從業者が對立することゝなる。其處でベルンシュタインは一斷定を下して言ふ、「故に『世界の仕事場』は尙ほ遙かに、世人の想像するが如き程度に於いて大工業の手中に歸してはゐらぬ。否な寧ろ産業上の經營は、英帝國に於いてすらも非常に多樣の分岐を示して居り、而して大小如何なる程度の經營も未だ其段階から消失したものはないのである。」（註一）

（註一）"Die Voraussetzungen," Ss. 94-95

右述の斷定を確證する爲に、論者は更に獨、佛、米、瑞、墺等の諸國の統計を詳述してゐる。今其大要を摘記すれば、一八九五年の獨逸産業統計を觀るも傾向は大體英吉利のそれと同一である。即ち大工業は一八九一年の英吉利の狀態と殆んど同一の地位を生産上に占めてゐた。大經營への進化は驚く可き速度を以て完成され、普魯西に於いては産業勞働者の三割八分が大工業に屬してゐた。それにも拘らずその大部分は尙ほ中小經營に屬してゐたのである。一八九五年の産業從事者千〇二十五萬人の中、三百萬人を多少超過する部分が大經營に、二百五十萬人が中經營（六人乃至二十人）に、而して四百七十五萬が小經營に落ちてゐた。其他手工業の親方は尙ほ百二十五萬人と註せられた。彼等工匠の數は一八九五年頃に至つて、五種の職業に於いては（人口增加に比して）絶對的にも相對的にも增加し、九種に於いては唯絶對的にのみ增加し、而して十一種に於いては絶對的にも相對的にも減少した。佛蘭西及び墺太利に於いては工業勞働者數は農業從業者數よりも少なく、前者に在つては農業は全人口の四割七分三厘を占むるに對して工業は僅かに二割五分九厘を示して居り（一八九四年の國勢調査）、後者に於いては農業は人口の五割五分九厘を工業は其二割五分八厘を占めてゐる。而も佛蘭西の工業に於いては、三百三十萬人の從業者に對して百萬人の獨立營業者があり、墺太利に於いては、二百二十五萬の勞働者及び日傭取に對して六十萬人の獨立營業者があつた。瑞西は十二萬七千の獨立營業者に對して四十萬の勞働者を工業界に有して居る。更に亞米利加合衆國の工業に至つては、一經營に就き比較的多數の平均勞働者を有してゐ

る。即ち工業經營の數三十五萬五千四百十五に對する三百五十萬の勞働者、換言すれば一對一〇の比であるが、併しこれとても普魯西産業統計の數を全部通計して得る平均數と殆んど同一である。其上其國勞調査の記錄を一層詳細に觀察するならば、一經營に就き平均五人及びそれ以下の勞働者を雇傭する無數の製造業を見出すのである。例へば三萬七百二十三人の勞働者を有する九百十ヶ所の農具製造工場、千九百九十三人の勞働者を有する三十五の軍需品工場、三千六百三十八人の勞働者を有する二百五十一の人造羽毛並に造花工場等の如きものである。（註二）

（註二）a. a. O, Ss. 96-98

以上の諸事實を觀察して結局ベルンシュタインは、「若し工業の諸部門に於いて絶へざる技術の進歩と經營の集中とが、今日熱狂的保守論者も殆んど秘密にするを得ざる程の意義を有する事實であるとするならば、産業の全部門に於いて中小經營が大經營と併存し得る能力を示してゐることも亦、前者に劣らぬ動かす可らざる事實」（註三）であることを確信すると同時に、「大經營は中小經營を吸收併呑することなく、寧ろ大經營は大經營として中小經營と相併んで發達し、たゞ極小經營のみが絶對的にも相對的にも減少しつゝある」（註四）旨を主張して居るのである。然らば何故實際の狀況は、世人の豫想を裏切つて中小經營の存續と再興を可能ならしめてゐるかと云ふに、論者の觀る所を以てすれば三個の理由の存するものがある。

第一、多くの工業と云ふものは、大經營でも小經營でも營み得るものであり、且つ此等に於いては大經營の中小經營に優る利益なるものは、小經營に本來特有の利益によつても相殺されぬ程重要なるものではない。この事が、一例を擧ぐれば、木材、皮革、金屬等の加工業に眞實なるは、既に世人の知る通りである。或は又これが爲に、大工業が製造過程の半分とか四分の三とかを實行し、小經營が最後の仕上を爲すと云ふが如き分業が發生するのである。

第二、生産物を消費者に遲滯なく供給するを必要とする場合には、多くは小經營の方が有利である。之が適例は麵麭製造業である。唯技術の點より觀れば斯る製造業も夙に大工業に獨占された筈であるが、尙ほ消費者と直接取引が出來ると云ふ理由から中小經營は今日も其地歩を占めてゐるのである。

第三は、大經營そのものが、一部分は大量生産及び是に伴ふ作業材料（補助材料、半製品）の價格の低落により、一部分は資本の相互反撥並に勞働者の『解放』によつて、比較的に小中經營を産み出してゐると云ふことである。即ち此場合には、前に述べた『株主』が重要なる役割を努めるのである。蓋し市場は極く少數の百萬長者を當てにしてゐたのでは、實際生活することは出來ぬ。多數の且つ漸次增加する所謂有福者の存在を看過することは出來ぬ。即ち此等の人々の奢侈品は殆んど總て、最初の內は—而して其大多數は其後も引續いて—中小經營に於いて製作せらるゝのが常であるからである。（註五）

（註三）a. a. O, S. 98
（註四）a. a. O. S. 100
（註五）a. a. Ss, 98-100

以上は單に工業に就いてのみの觀察であるが論者は更に商業の實狀をも調査して、結局大規模小賣商店の急激なる發達にも拘らず、小規模並に中規模商業の尙ほよく其地歩を占めつゝあることを斷言して居るのである。一例として普

魯西に於ける商業並に交通業（鐵道及び郵便事業を除く）從業者數を表示すれば次の如くである。

從業者數による經營の種別	從業者數 一八八五年	從業者數 一八九五年	增加率
二人未滿の經營	四二、五〇九	四六、六六六	一三・六%
三—五人の經營	一七六、八六七	二四二、一二三	九三・四%
六—五〇人の經營	一五七、三八	三〇三、〇七八	九二・六%
五一人以上の經營	三五、六二九	六二、〇五六	一四二・二%
	七四、三三一	一、二四四、七〇二	五二・三%

右の比率によつて觀れば增加は大經營に於いて最も大であるが、併し大經營の代表する所は全體の五分を超過すること僅少である。小商業に對して殺人的競爭を爲すものは大商業ではなく、却つて小商業が相互に其能力だけの競爭を爲すのである。而も其割合に劣敗者となるものは少なく、大小各種の經營は何れも其姿をかくしたものはない。就中最大の增進を示せるものは小規模の中經營である。故に彼は言ふ大工業の中小工業併呑を信ずるの幻影たると等しく、資本家的大商業の中小商業吸收を期待するも亦空想たるを免れぬと。（註六）

（註六）a. a. O., Ss. 101-102

更に從來の社會主義學說と甚しく背致するものは農業であり、農業に在つては、商工業に於ける大經營への移動が豫想よりも緩漫に行はるゝに過ぎぬに對して、其靜止又は其縮少をすら示してゐることを、ベルンシュタインは立證してゐるのである。此場合にも論者は可なり精密なる統計を引用してゐるが、一々之を說述するの煩しさを慮り其一二を概記するに止めよう。

先づ獨逸の狀態を觀るに、一八九五年の調査は一八八二年のそれに比して、中經營（五乃至二〇ヘクタール）の部類に比較的最大の增加を示してゐる、即ち約八分の增加である、而して

其有する土地面積の增加は一層大で、九分に達してある。これに續ける小經營（二乃至五ヘクタール）は、第二位の大增加を示し、三分五厘の經營增加と八分の面積增加である。極小經營（二ヘクタール以下）は五分八厘の增加を爲し、其面積は一割二分の增加である。既に幾分資本主義的なる大農經營（二〇—一〇〇ヘクタール）の示した增加は全く一分にも達せず、それも全然林業に屬する。而して大經營（一〇〇ヘクタール以上）は更に三厘の增加すらも示さず、且つその增加も林業に屬してゐるのである。

斯る傾向は和蘭、佛蘭西、白耳義、伊太利等の諸國に就いても之を認め得らるゝが、更に大なる土地所有と資本主義的農業の祖國たる英吉利に於いては果して如何なる事情に在るか。マルクスは『資本論』中の一句（第一卷、第四版六一五頁）に於いて、百五十人の地主が大不利頭の土地の半分を、而して十二人の地主が蘇格蘭の土地の半分を、所有してゐるとのジョン・ブライトの斷言は否定されなかつたと述べてゐるが、ベルンシュタインの見解に依れば、英吉利の土地が如何に獨占的に集中されてゐようとも、決してジョン・ブライトの主張の如き程度に於いてゝはないと云ふのである。この事は左の一表が雄辯に之を物語つてゐる。

經營種別 ヘクタール	一八八五年	一八九五年	增減
二—二〇	二三二、九九五	二三五、四八一	（十）二、五二六
二〇—四〇	六四、七一五	六六、六二五	（十）一、九一〇
四〇—一二〇	七九、五七三	八一、二四五	（十）一、六七二
一二〇—二〇〇	一三、八七五	一三、五六八	（—）三〇七
二〇〇以上	五、四八九	五、二一九	（—）二七〇

即ち大經營及び過大經營は其數を減じ、中小經營は增加を示してゐる。併し此表は、此等經營の占むる耕地面積に就いて何等吾人に敎ふる所がない。故に之を面積に引き直して一八九五年の實狀を觀れば次の如くである。

經營種別 ヘクタール	四〇アールの割合としてのエーカー	各種經營に屬する面積の總面積に對する割合
二以下	三六六、七九二	一・一三％
二—五	一、六六七、六四七	五・一二％
五—二〇	二、八六四、九七六	八・七九％
二〇—四〇	四、八八五、二〇三	一五・〇〇％
四〇—一二〇	一三、八七五、九一四	四二・五九％
一二〇—二〇〇	五、一一三、九四五	一五・七〇％
二〇〇—四〇〇	三、〇〇一、一八四	九・二一％
四〇〇以上	八〇一、八五二	二・四六％
	三二、五七七、六四三	一〇〇・〇〇％

以上の表に依るも、大不利顛の耕地面積の二分四厘六毛が過大經營に屬するに過ぎぬ。其六割六分以上が中、大農的經濟に屬することを知るのである。

以上の事實を總覽して論者は、西部歐羅巴の全地方並に亞米利加合衆國の東部諸州に於いては、一般の農業上の小中經營は增加し、大或は過大經營の減少しつゝあることは疑ひを容るゝ餘地なしと認め、經營の集中は、マルクスの思惟せしが如き一個の經濟に土地の益々大なる面積が兼併せらるゝと云ふ形式に於いては行はれず、寧ろ經濟の集約換言すれば一定面積の土地により多くの勞働を要する耕作法への變化か或は複雜進歩せる牧畜業への進化か何れかの形式に於いて行はるゝ旨を斷言するに至つたのである。（註七）

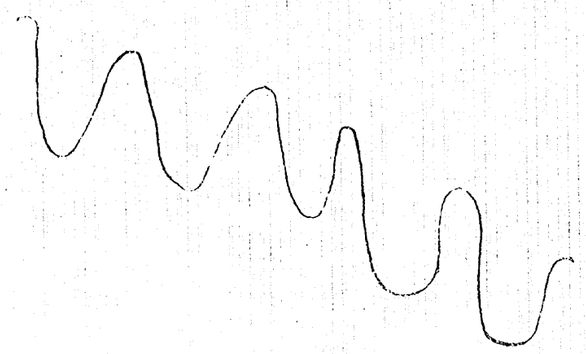
（註七）a. a. O, Ss. 102-107

斯くして遂にベルンシュタインは、先進工業諸國の統計の示せる「所得の諸部類は、工業商業並に農業に於ける經濟單位の階級順位と根本的に相反するものではない。所得等級の順位と經營等級の順位とは、それ〳〵可なり著しき平行を示してゐる、殊に中間の諸等級を觀察する限りに於いては然りである。吾人は、此等の中間成員が何れの場所に於いても減少してゐるのを見ない、寧ろ殆んど到る所に於いて著しく增加しつゝあるを知るのである」と結論し、マルクシストに對して次の如き警告の一矢を發してゐるのである。曰く「若し近世社會の崩解が社會なる三陵塔の頂點と底邊との間に介在する中間成員の滅失に由つて定るものならば、此等中間成員が其上層と下層に在る兩極端に吸收併呑せらるゝことを條件とするものならば、英吉利、獨逸、佛蘭西に於いて其實現は、今日（一八九九年）猶ほ第十九世紀中の如何なる初期の時代に於けるよりも一層接近しては居らぬのである」（註八）と。

（註八）a. a. O, Ss. 107-108

五

次にマルクス說に從へば、今日の資本主義社會に於いては各個の經營內には整然たる秩序が存するけれども、社會全體の生產には之を指導すべき何等の聯絡統一なきが故に恐慌の襲來は免れぬ、且つ其恐慌は漸次猛烈頻繁となり、結局生產手段の私有は生產力の發達と兩立し難くなる筈である。而して今エルフルト綱領に現はれたこの理論を一の曲線を以て表はせば次の如くなるであらう。



即ち商業市況は、其下降が漸次長くなり、其上昇は漸次短くなる、且つ好景氣時代の最初と正に新しき恐慌に入らんとする時期との間の期間は益々短くなつてゐるのである。（註一）

（註一）"Der Revisionismus in die Sozialdemocratie," Ss. 34-35

併し斯くの如き恐慌說も勿論ベルンシュタインの直ちに讃意を表する能はざる所である。先づ彼は、恐慌の起因に關するマルクスの言には矛盾に似たるものあるを指摘せんとする。即ち社會主義者間に最も普通に行はるゝ經濟恐慌の說明は、消費過小に其原因を求めてゐるが、エンゲルスは再三此解釋に反對した。例へばアンチ・デューリング論の第三章第三節に於いては、一般民衆の消費過小も『亦恐らく恐慌の一條件』であらうけれども、それは恐慌が往時に存しなかつたことを殆んど說明しないと同樣に、これが今日存することを說明しないものであると述べてゐる。又マルクス自身も恐慌の原因を消費過小に求むる說に對して屢々强硬に反對した。『資本論』第二卷に於いては曰く「恐慌は支拂能力ある消費の缺乏より起ると云ふは、單に同義異語を反覆したに過ぎない。」若し勞働者階級は彼等自身の生產物の非常に僅少なる部分を得るに過ぎない、從つて彼等がそれのより多くの部分を受くるならば直ちに其不幸の素因は救濟さるゝであらうと云ふ言を以て、右の同義異語の反覆に一層深い根據らしきものを與へようと欲する人があるならば、其結果認め得らるゝことは、唯「恐慌は如何なる場合にも、勞銀が一般に上昇して、勞働者階級が年々の生產物中消費の用に供せらるべき部分から、以前よりも一層多量の分配に實際與る所の或期間によつて、正に先導さるゝであらう」と云ふことに過ぎぬであらう。斯くの如くして、資本主義的生產は『善惡何れの意志にも無關係なる諸條件を包含し、而して其諸條件は右の如き勞働者階級の相對的繁榮をたゞ一時的に、而も常に恐慌と云ふ暴風の襲來を告ぐる海燕としてのみ、許容するものである』やうに見える（四〇六—七頁）と。

然るにマルクスの斯る言は『資本論』第三卷第二部に在る章句とは可なり著しき矛盾を示してゐる。曰く「あらゆる現實的恐慌の終極の原因たるものは常に一般民衆の貧窮と消費制限とであつて、これは、生產力をば宛も社會の絕對的消費能力のみが其限界なるかの如くに其點にまで發展せしめんとする資本主義的生產の衝動に相ひ對比せるものである。」（二一一頁）即ち此場合にマルクスに在つては民衆の消費過小は、生產上の無政府に對してすらも、あらゆる現實的恐慌の窮極的原因として强調されてゐるのである。

斯くの如きマルクスの矛盾は、ベルンシュタインの觀る所に依れば、兩論文の起草せられた時期の相違に求めなければならぬ。而も第二卷より引用句の方が新しいものであり、且つ第二卷はマルクスの研鑽の最も晩年の爛熟せる結果を包含せるものであるから、これに彼は重きを置いてゐる。既にマルクスは第二卷の他の章句に於いて、恐慌の周期的性質を固定資本の廻轉期間と結び付けて說明してゐる。即ち資本主義的生產の發展は、一方に於いて固定資本の價値量と壽命を擴大する傾向を有すると同時に、他方に於いて此壽命を生產手段の斷えざる變革によつて短縮する傾向を有してゐる。故に固定資本の此部分は『物理的に壽命の盡きて了は』ないうちに、『精神的に消耗』して了ふのである。「斯くの如き、相互關聯した諸回轉の、何個年かを包括せる循環によつて、事業の通過すべき沈

滯、適度の活動、過度の活潑、並に恐慌の相互連續せる各期間を含める周期的恐慌の物質的基礎が生じ來れるのである」。（一六四頁）斯る見解は、同卷に於いて資本の再生産を論ずる場合にも現はれてゐて、不變の勞働生産力を以てするも、同一段階に於ける再生産に在つてすらも、固定資本の壽命に一時的に現はるゝ相違（例へば或年に於いては其前年に於けるよりも、固定資本のより多くの部分が磨滅する場合の如く）は、如何にして其結果として生産恐慌を惹起さゞるを得ないかを解説してゐる。而して外國貿易は此生産恐慌を救濟し得ることは事實であるが、其は單に其矛盾（恐慌）を擴大された範圍に移し、又之により廣い活動の場所を開き與ふるに過ぎないと言つてゐる。

以上の如き、市場の擴大は資本主義的經濟の爭鬪をより廣き範圍に移し從つて之を增加せしむるものであると云ふ思想は、第三卷に於ける種々の機會にエングルスによつて更に新しい現象にも適用せられてゐる。即ち第二部二七頁の註に於いては、マルクスの執筆以後に起れる運輸交通機關の異常なる發達、常に新工業國が英國との競爭場裡に入り込むこと、及び歐羅巴に於いて剩れる資本の投資範圍の不斷の擴大を擧げて以て『多くの古い恐慌の坩堝と恐慌發生の機會とを除去し又は非常に薄弱なるものとなした』所の要因となしてゐる。然るにカルテルとトラストを以て內國市場に於ける競爭制限の手段として說明し、又英國以外の世界を圍繞せる保護關稅を以て世界市場に於ける支配力を決定すべき所の、最後の一般的工業戰爭に對する出師準備として指示したる後に、次の如く述べてゐる。「斯くの如くして、古い恐慌の再發を妨害すべく努めてゐる要因の各々は、其れ自身の內に將來の一層激烈なる恐慌の萠芽を藏してゐる」と。

斯くの如きマルクス說を點檢したる後、ベルンシュタインは前代未聞に猛烈なる經濟的危機の徵候は未だ確證されないし、又恐慌と恐慌との間に介在する商業の好景氣を特に短期のものと何人も斷言することは出來ぬと謂つてゐる。否な彼の主張する所は、世界市場の範圍の非常なる擴大は、通信、運輸及び交通に要する時間の異常なる短縮と相俟つて、擾亂（恐慌）調整の可能性を增加すると同時に、歐洲工業諸國の富の莫大なる增加は、近世信用制度の彈力性及びカルテルの勃興と相俟つて、一地方又は個々の擾亂の一般市場の狀態に及ぼす反動力を非常に減殺したと云ふのである。（註二）

（註二）"Die Voraussetzungen," Ss.109-114

是に對しては勿論、信用は恐慌に反作用を及ぼす所か、却つて之を最頂點にまで進行せしむる手段である、蓋し信用は資本主義的產業の無限の發展、商品交換の速度の增加、生產行程の循環期の促進を可能ならしめ、斯くして生產と消費との間の不調和を出來るだけ屢々發現せしむる手段となる。加ふるに不景氣が始るや、信用は縮少して恐慌を激成すると非難する者例へばローザ・ルクセンブルグの如きがある。併しベルンシュタインに依れば、これは信用制度の作用の中一面のみを觀たものである。マルクスと雖も信用制度を唯破壞的原因としての見地よりのみ取扱つてはゐない。信用制度には有害なる作用あると同時に有益な作用をも存するが故に之を無視してはならぬ。而して信用制度が投機を容易ならしむと云ふのは數百年昔の經驗である。元來投機は知り得る事情と知り得ざる事情との關係如何によつて制限せらるゝもので、

後者が優勢となればなる程投機は旺盛となり、是に反して前者が後者を壓すればする程投機の餘地は縮少さるゝものである。故に商業上の投機は、資本主義時代の初期に最も激烈であり、工業上に於いては新しき生産部門に投機は最も盛に行はるゝ。一生産部門が近代的工業として古ければ古き程、從つて市場の狀況と變動とは一層確實に豫測せられ又一層精確に觀測せらるゝから、投機的要素は決定的役割を演ぜざるに至る。勿論この確實性は常に相對的のものである。蓋し競爭と技術的發達とは市場の絶對的支配を不可能ならしむるものであるからである。故に生産過剰は或程度まで避く可らざるものである。併しながら個々の工業に於いては、生産過剰は一般的恐慌を意味するものではない。それが或一般的恐慌を導くには、該工業の不振が此等の工業をも直ちに停止せしむる程重要なるものでなければならぬ、或はさもなくば該工業は、金融市場の媒介により若しくは一般的信用の無力なるによつて、此等の工業から生産繼續の資料を奪ひ去るものでなければならぬ。然るに國が富裕なればなる程、而して其信用制度が發達してゐればゐる程、此最後の作用は益々行はれさうにもなくなることは明白である。何となれば此場合には調節の可能性が益々其程度を增すからであると謂ふのである（註三）

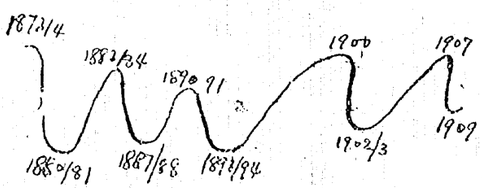
（註三）"Die Voraussetzungen," Ss. 114-121

更に反對論者は企業家團體が恐慌の豫防手段たり得ることを否定せんとする。蓋し聯合せる企業家達は、內國市場に於いて用ひられざる資本の部分を外國向の貨物を生産する爲に低い利潤を以て利用し、斯くすることによつて內國市場に於いては一般により高き利潤率を獲得するから其結果世界市場には、一層擴大された無秩序を生ずると云ふのが其主たる理由である。斯る非難に對してベルンシュタインは其總てを否定せんとしてはゐない。即ち「近世工業國に於いてカルテル及びトラストが保護關稅によつて維持され强固にさるゝ場合には、彼等は當該工業の恐慌の要素とならざるを得ない—又結局其『保護された』國そのものにとつても恐慌の要素とならざるを得ない」と述べてゐる。併しながらベルンシュタインの見解に從へば、保護貿易制度は何等經濟の産物ではなくて、寧ろ經濟的の結果を得るを目的とする政治的權力の、經濟方面への蠶食である。而して工業組合としての企業家團體は明かに右と異るものである。此種團體は經濟そのものゝ地盤の上に成長したもので、生産を市場の景況如何に適應せしむる純經濟的手段である。故に此種組合は、市場の供給過剰に際しては、個人企業よりも遙かに僅少の危險を以て一時的の生産制限を實行することが出來る。此種組合の一層有效なる點は、外國の投賣に好く應ずると云ふことである。故に若し何人か、カルテル及びトラストが恐慌の性質並に度數を限定するの作用を爲し得ることを原則に於いて拒絶せんとする者があるならば、其人は組織が無秩序なる競爭に優ることを否定する者であると論駁してゐるのである。（註四）

（註四）"Die Voraussetzungen," Ss. 121-125

而してベルンシュタインは右述の理論を確證する爲に、獨逸の恐慌の歷史と統計を參照してゐる。それに據れば、一八七一年より一八七三年に亘つて非常なる好景氣の時代があつた。總てが黃金の中に漂ふが如く見え、巨額の資金が如何はしい企業に投ぜられた。續いて一八七三年に大不景氣が來り、其結果一八七四年には恐慌と反動時代が始つた。これは一八八〇—八一

年まで約七年間持續し、其後の如何なる恐慌よりも一層多數の失業と一層深刻なる窮乏とを產んだ。一八八一年に至り漸く或程度の好景氣を見たが、それも長續きせず、一八八三年を峠として再び新らたなる反動時代に入り、一八八七―八八年の頃まで繼續した、それから復た一寸した好景氣が現はれたが、僅かに三年續いたのみで一八九一年を以て繁榮時代は終りを告げた。エルフルトの綱領は實に此年に草せられたのであつた。同時に此年は、一八九三年まで續いた新しい不景氣時代の初年となつた。然るに其次には嘗て見なかつた程の好景氣が到來した。それは程度に於いてのみならず、その持續期間に於いても從來其例を見なかつた程のものである。この好景氣は一九〇〇年まで繼續して反動時代に入つたが、その反動は大して劇しいものではなく一九〇三年には經過してゐた。而して恢復した景氣は非常な勢ひで一九〇七年まで續いた　其年にまた別の不景氣時代に入つたのである。さて此實狀を曲線を以て描寫するならば次の如くなるであらう。



茲に於いてベルンシュタインは、エルフルト綱領の示すが如くに記錄した既揭の曲線と右の圖とを比較したならば、その相違は實に驚く可きものがある、市況も曲線も、從來社會民主黨員の抱懷せし所とは全く相違してゐるのである（註五）と論結して、マルクスの恐慌說をも一蹴して了つてゐるのである。

（註五）"Der Revisionismus in die Sozialdemocratie," Ss. 35-36

六

以上吾人の述べ來たつた所は、ベルンシュタインのマルクシズムに對する批評の一部であるが、併し彼の批評の重要なる部分及び彼の思想の大體は之を述べたつもりである。且つ社會主義學說中に未だ殘存せる空想的なる考へ方を一掃せんとする彼の目的も略々明白になつたこと、思ふ、蓋し彼の所論にして正當であるとすれば、マルクス主義には未だ空想的の分子を含んでゐるものと言はねばならぬからである。然らば社會民主黨は其間に處して如何に進退を決す可きか、これに對するベルンシュタインの見解は本稿の目的とする所に非るが故に茲には不問に附する。唯上述の所論よりも知り得らるゝ彼の結論の大要を述ぶれば。資本の集積と言ひ、經營の集中と言ひ、將た又恐慌と言ひ總てマルクス說の如くに發現しては居らぬ。換言すれば近世社會の經濟的發達はマルクスの理論に從つて居らぬ。故に資本主義社會の崩解はマルクス主義者の考ふるが如くに近き將來に來るものではない。實際『共產黨宣言』中に叙述されてゐる資本主義社會發達の徑路は、傾向としては正しいものであるが、其際マルクス、エンゲルスは其經過に要する時間を餘りに短く見積り過ぎてゐる。而もエンゲルスは後年に至つて、彼等が誤算を爲せしことを明白に認容してゐるのである。既に其これに要する時間に甚しき相違の存

する以上、社會發達の形式も『共産黨宣言』の豫言とは趣を異にしなければならぬ。してみれば從來社會民主黨が、近き將來に來るべしと思惟せしカタストロヘを目的とした政策は誤りなるが故に、之を拋棄しなければならぬ。而して寧ろ一歩々々着實に勞働者階級の精神的肉體的向上を圖るの途に進まねばならぬと謂ふのである。彼自らの言を借りて端的に言へば「社會政策的任務の縮少に非らずして、寧ろ是が增大及び修正」である。

最後に一言附加するは斯くの如き見解が二つの目的の爲に利用されてゐると云ふことである。即ち一は、ベルンシュタイン一派の如くに、之を以て社會主義改革の運動に利せんとする者あると同時に、他は之を以て社會主義を打破するの具に供せんとする者があると言ふことである。（完）

佛教に於ける四方の思想について

友松圓諦

一、原始佛教徒の乞食遊行

美しく繁茂した樹園（Ārāma）と、その樹々の間に點在してゐる靜かな僧房（Vihāra毘訶羅）とから成り立つてゐるところの僧伽藍（Saṃghārāma）に定住して、宗教上の保護者たる檀越（Dānapati 檀那鉢底）から豐かな衣食の供給を受けて、心ゆくばかり平安な禪定生活をいとなむことの出來たのはかなりに後のことである。

佛陀（Buddha）と、並びに彼に早く隨從したところの弟子達とは何らの固定的住所（Senāsna）を持つことなく、村落（Gāmo）から村落へと遷流定まるなき雲水のやうな遊行（Cārikaṃ）生活をいとなんだのである。彼らは乞食する（Bhikkhati）ために毎日の午前を村落都市（Nagaraṃ）の人間（Manussesu）についやさねばならない。彼らの手にせる鉢がみたされるまで家から家へと遍行してゆくのである。彼らは又、その衣服を調製するためには塵塚や屑溜の中から襤褸を拾ひ集めなければならない。かくして彼らは何らの「蓄積を要しない」（sannicayo n'atthi）ところの、あの大空をとびゆく鳥のやうに自由なる、そして又簡素な乞食遊行の生活をしてゐたのである。

彼らの生活はかくしてたゞ彼ら自身によつて維持されなくてはならない「爾らよ、二人して一つ路をゆくこと勿れ」（mā ekena dve agamittha）とは佛陀が嚴かに彼の弟子に宣言するところであつた。こゝに於てか孤獨と忍苦とは彼ら初期佛教徒のつとめてこれに從つたところであつた。彼らは群集を去つて靜かな森間に、心動かす家居を遠離して人跡まれなる山窟に彼らの宗教的生活を完成しやうとつとめた。次の三四の文字は彼らの心境を物語つてゐる。

「比丘ら（bhikkhū）が森の中の座に心樂しむ間は比丘らは亡ぶことなく、更に榮えん」(3)

「世俗を離れ、孤獨の座、樹下、墓地、に心樂しみ、且つ山窟に住む比丘」(4)

「たゞ一人坐し、（ekāsanaṃ）たゞ一人臥し（ekaseyyaṃ）たえまもなく、たゞ一人遊行し、（eko caraṃ）たゞ一人自らを愼しみ守り、かくして森近く靜寂を愛すべし。」(5)

「貧しい衣を身につけ身體はやせ、靜脈は悉く皮膚にあらはれ、しかもたゞ一人森の中に靜思する人、（ekaṃ vanasmiṃ jhāyantaṃ）かゝるをこそ吾は婆羅門とよばん」(6)

「家族生活をしてゐる者、又家を離れたる者、